スポーツ集団における学生アスリートの セルフマネジメントに関する研究： スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度の開発

竹村 りょうこ¹⁾ 島本 好平²⁾ 加藤 貴昭³⁾ 佐々木三男³⁾

Ryoko Takemura¹, Kohei Shimamoto², Takaaki Kato³ and Mitsuo Sasaki³: Self-management for student athletes in sports groups: Development of a Sport Self-management Skill scale. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 58: 483-503, December, 2013

Abstract : This study was performed to develop a scale for evaluation of student athletes in sports groups and to examine its reliability and validity, focusing on verification of the sports self-management skills of individual athletes.

First, 61 items were developed using existing scales. These items were then administered to 126 student athletes (5 teams, 66% male) using a 5-point rating scale and an open-ended questionnaire. To ensure objectivity, a university teacher from a department other than sport, 5 university teachers specializing in sport, and 3 graduate students from the same field also examined the items collected and developed. The items were examined for whether they expressed “self-management skills.”

In the main research, an exploratory factor analysis was conducted using data from 603 student athletes (35 teams, 51% male) from various athletic clubs in Kanto, Japan. This revealed that 32 items were divisible into 8 factors: team contribution, thinking ability, self-introspection, conscientious attitude, continuous effort, achievement effort, task improvement, and creativity and originality.

By analyzing these factors, sufficient reliabilities were confirmed: the Cronbach's alpha coefficient was .66-.83 on the scale. The construct validity was supported because significant correlations with the existing scales were evident.

Comparison of the score between the team's affiliation level and the 8 factors of sport self-management skills revealed that for 7 of the factors, with the exception of “conscientious attitude”, the score for self-management skills of a high-level sports team became higher than the others. Thus, with regard to verification of validity, it was revealed that a team composed of individuals with high sport self-management skills also played a high-level game.

Thus, the final sport self-management skill scale comprised 4 items for each of the 8 factors, adding up to 32 items.

Key words : group study, scale development, group cohesion, collective efficacy

キーワード : 集団研究, 尺度開発, 集団凝集性, 集団効力感

- 1) 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤5322 慶應義塾
大学湘南藤沢キャンパス
- 2) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1
- 3) 慶應義塾大学環境情報学部
〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤5322 慶應義塾
大学湘南藤沢キャンパス
連絡先 竹村 りょうこ

1. Graduate School of Media and Governance, Keio University
5322 Endo, Fujisawa-shi, Kanagawa 252-8520, Keio University Shonan Fujisawa Campus
2. Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494
3. Faculty of Environment and Information Studies, Keio University
5322 Endo, Fujisawa-shi, Kanagawa 252-8520, Keio University Shonan Fujisawa Campus
Corresponding author ryoko62@sfc.keio.ac.jp

問題と目的

集団研究の変遷と問題提起

スポーツ集団を対象にした尺度開発は、1960年代から1980年代に活発に行われ、集団凝集性（以下、集団凝集性、または凝集性と称する）、集団成員性、集団魅力という観点から尺度が開発された（丹羽，1968；丹羽・東山，1968；竹村・丹羽，1968）。集団凝集性とは、「集団のまとまり」（Lewin, 1943）を示す概念で、一般的には「メンバーが集団に留まるよう作用する力」（Festinger, 1950）、「崩壊させる力に対する集団の抵抗力」（Gross and Martin, 1952）という定義が用いられる。海外では「個人と個人の関係」、「個人と集団の関係」、「集団のまとまり」といった3カテゴリーから構成される Sports Cohesiveness Questionnaire (Martens and Peterson, 1971) や、Carron et al. (1985) によって、個人にとっての集団の魅力と集団の統合を、課題的側面と社会的側面のそれぞれから説明する Group Environment Questionnaire（以下、GEQ と称する）などの尺度開発が展開された。集団凝集性と集団のパフォーマンスの因果関係に着目する研究が中心になる中、長谷川（1981）は、多義に渡る集団凝集性の見解をいくつかの側面で分析することによって明確にする目的で、集団凝集性尺度を作成した。その後、阿江（1986）によって、概念をさらに一致させる測定尺度の開発を目的とし、Yukelson et al. (1984) によって作成された尺度の項目と、新しく作成された項目をもとに、凝集性尺度の再検討がなされた。結果からは、「チームワーク」、「魅力」、「目標への準備」、「価値の認められた役割」という既存尺度と対応する4カテゴリーとは別に、「メンバーの親密さ」が抽出されたことから、日本の大学生チームにおいて、チームワークが技能的な側面として捉えられているのではないかと示唆しており、日本における尺度開発の必要性を説明する研究となった。

スポーツ集団における凝集性を理解するために、Carron (1982) は凝集性に及ぼす要因として、

環境要因、個人要因、リーダーシップ要因、チーム要因の4つからなる構造モデルを提起した。チームの組織構造や求められる競技レベルなどの社会的なプレッシャー、集団がさらされている環境的な外的要因としての環境要因、コーチや指導者などの集団の中心的立場にある者のリーダーシップやリーダーと選手の関係性を示すリーダーシップ要因、集団を構成するメンバー個々の個人的属性、態度、信念、動機づけ、責任感や不安、社会的手抜きなどの個人要因、集団の種目特性や志向性、規範などのチーム要因、それぞれが凝集性に影響を及ぼす要因とされている。また、Carron et al. (2002) は、GEQ とパフォーマンスの間には中程度の関係がみられ、凝集性とパフォーマンスが互いに及ぼす影響度は相補的であることを示した。

近年の特徴としては、「集団効力感」という概念に立脚した研究も行われている。集団効力感は、Bandura (1986) によって「課題の達成に必要とされる行動を系統立て実行するための能力に対する集団で共有された信念」と定義され、自己効力感 (Bandura, 1986) を起源に持つ心理的概念とされている。また、Zaccaro et al. (1995) は「状況の要求に上手に協力して反応するために自分たちの能力を配分、調整し、統合する場合に共有する集団的能力」と定義し、集団効力感に関連する要因を「言語的説得」、「代理経験」、「以前のパフォーマンス」、「集団のリーダーシップ」、「集団凝集」、「集団サイズ」としてまとめている。その中でも、「言語的説得」は、自身やチームに能力があることを言葉により説明や励ましを受けること、「以前のパフォーマンス」は過去に達成した経験から成功体験を獲得することであり、これにより遂行可能感が高まると考えられている。

近年はこれらの集団効力感の概念に立脚した研究がみられ（尼崎・清水，2009；永尾ほか，2010），集団効力感尺度を用い、中学生の学級を対象として調査票を作成した本郷（2005）の研究では、集団相互支援効力感と集団結束効力感という2つのカテゴリーをとりあげ、それぞれが相互に関連しあっていると説明した。スポーツ場

面においては、「一定水準の課題達成を生み出すための共同の能力において集団で共有された信念」(Feltz and Lirgg, 1998)や「チームの能力に対してチームで共有された自信のメンバーそれぞれの信念」(Bray and Widmeyer, 2000)」として定義されている。集団効力感とチームのパフォーマンスの関係を検討した研究も多くみられ(Feltz and Lirgg, 1998; Kozub and MacDonnell, 2000; Ronglan, 2007), チームの勝利後に集団効力感が高まるなど, 両者の間には正の関連性が認められている。

このように, 集団研究の中で開発されている尺度は, チームに所属する成員がチームのまとまりを評価する観点で開発が進められてきたが, 集団凝集性や集団効力感のみで集団の特徴をとらえることには限界があるといえる。例えば, 集団内で発生すると考えられる負の出来事として, 高い競技成績を残している成員が逸脱するケースや, レギュラー選手として試合に出場する機会の少ない成員のモチベーションの低下, 集団内の規則や周囲の意見への過度な同調などである。これら個々の成員に見られる課題を集団凝集性や集団効力感から把握することは難しい。周囲への過度な同調に関して言えば, 時に自己主張を行い, 様々な意見の中で集団の規範を修正していくことが, 多様な思考をもった集団のあるべき姿とも考えられよう。また, 集団の合議による決定が愚かで浅慮の様態になる「集団浅慮」(Janis, 1972)の事態や, 集団の規模が大きくなるほど個々人の努力量が少なくなる「社会的手抜き」(Latane et al., 1979)も, 集団内で発生すると考えられる負の出来事として挙げられよう。これらのことから, 優れた集団としての特徴を詳細にとらえていくためには, 集団凝集性や集団効力感とともに, 集団における選手個人の能力に着目していく必要があるといえる。また, そのような能力の具体像を明らかにすることで, 個人レベルでの負の出来事を予防するとともに, 集団凝集性や集団効力感を高めることにつながる, 介入面での実践的示唆が見出されることが期待される。

スポーツ集団における選手個人の能力とは

2010年に文部科学省は, 「スポーツ振興法」を見直し, これに代わる「スポーツ基本法」の検討を視野に入れ「スポーツ立国戦略」を新たに示した(文部科学省, 2010)。トップアスリートに関する記述には, 「トップアスリートが有する優れた技や人間的な魅力とスポーツを通じて培ったコミュニケーション能力やマネジメント能力を積極的に地域に還元することにより, 青少年を含む人々のスポーツへの参加意欲を高め, 地域から新たな才能が発掘されることが期待できる」としている。ここでいうスポーツを通じて培った「マネジメント能力」とは, スポーツをすることによって得られる競技スキルの習得, 他者との関わりの中で養われる心理面, 体力向上に向けた取り組みなど, 様々なスキルを獲得するまでの過程としてのマネジメント能力と考えられるが, その具体的な側面については明らかにされていない。

マネジメント能力に焦点を当てた個々の研究を概観すると, セルフマネジメントという用語が多くの研究の中で曖昧に用いられている(上田ほか, 2005)。海外では将来に渡って持続可能な健康と幸せな生活をもたらすための, シニア層に向けた認知行動能力を評価する self-management ability scale が作成されており, well-being をもたらす要因を taking initiatives, investment behavior, variety, multifunctionality, self-efficacy, positive frame of mind の6因子30項目からなる質問紙によって調査している(Schuurmans et al., 2005; Cramm et al., 2012)。また, 日本では医療の現場において, 糖尿病看護での患者教育が知識伝授型から患者の生活の質を重視したセルフマネジメント支援型へ移行することがのぞましいとされることから, セルフマネジメント教育として様々な探求が進められている(金丸・中村, 2010; 金丸ほか, 2005)。ここでは, 糖尿病をコントロールするための知識そのものよりも, それをどのように活用し日々の療養行動を自己決定していくかという応用力や実行力を重視していくこととしており, セルフマネジメントの向上は患者の QOL や満足度, well being につながると考えられている。

(多崎ほか, 2006). また, 看護学教育の現場における, 生涯にわたり自己の能力を開発・発展させ自己成長に繋げるセルフマネジメントとして, 能力の育成に取り組んだ調査報告が数多くなされている(池西ほか, 2001; 宮本ほか, 2002; 両羽ほか, 2003; 吉井・八塚, 2009). 一方, セルフマネジメントを組織経営学の視点から捉えた二宮(1998)は, セルフマネジメントを「組織的活動として組織の中における個人の活動を, 主体的にマネジメントすることを意味し, 目的を自律的かつ主体的に決定すること」と説明している. このように先行研究におけるセルフマネジメントは, 生涯に渡って充実した社会生活を実現するため, また, 組織という集団としての成功に繋げるための, 個人の自律と自己の能力を活用する力と読み取ることができる. 獲得した能力は, 所属する集団における様々な場面で汎用可能であることを示唆している.

また, 本研究では, 集団における選手個人のマネジメント能力の具体像を明らかにする上で, 経済開発協力機構(Organisation for Economic Cooperation and Development: OECD)の制定したキー・コンピテンシーの概念を研究の根底に位置付けることにした. キー・コンピテンシーとは, 将来実施される国際調査に共通する能力の概念を1つにまとめる為, 諸外国の専門家によって成人の能力概念を整理し, 新たな定義を行おうとするDeSeCo (Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations)プロジェクトによって見出された概念である. キー・コンピテンシー自体は「個人の成功と正常に機能する社会のために必要な鍵となる能力」と定義され, 「異質な集団で活動する力」の対人的側面, 「自律的に活動する力」の個人的側面, 「資源を相互的に活用する力」の資源活用的側面に加え, 「思慮深い思考と行為」という側面から構成される(DeSeCo/OECD Executive summary, 2005; ライチェン・サルガニク, 2008). また, この概念はスポーツ集団にも適用可能であり, 対人的側面の「異質な集団で活動する力」は, 仲の良い集まりではなく, 同じ目的のために集まった

多様性を持つ集団の中で活動する力, 個人的側面の「自律的に活動する力」は, 個人がチームの中で自律して活動する力, そして, 資源活用的側面の「資源を相互的に活用する力」は, 選手個人が資源を用いて様々なスキルの習得や環境や社会と相互作用していく力, とそれぞれ考えることができる. また, 各国の多くの専門家による協議によって作成されており, 一般性が高いと考えられることから, スポーツ集団における選手個人のマネジメント能力をとらえていく上で非常に有益な示唆を与える概念であるといえる.

キー・コンピテンシーの概念を扱った研究として, 黒澤(2010)は, キー・コンピテンシーを「自己の範囲に留まるコンピテンシー」と「他者や事象と関わりのあるコンピテンシー」に大別し, 学力, 人間性, 健康体力それぞれにおける両コンピテンシーに着目している. そして, 生涯の各発達段階において学習の連続性が保たれているかを明らかにしている. 一方で, キー・コンピテンシーの概念をスポーツ場面に適用した研究は未だ見られていない.

本研究の目的

本研究では集団研究への問題提起と共に, 実社会においてその活用が期待されるキー・コンピテンシーの概念をもとに, スポーツ集団に所属する選手個人のマネジメント能力を, 「集団の競技パフォーマンスに正の影響を与える, 選手自身が主体的に思考・行動し, 実践する自己活用力」と定義し, 以後, 「スポーツ・セルフマネジメントスキル」と呼ぶことにした.

このスポーツ・セルフマネジメントスキルは, OECDの制定したキー・コンピテンシーの概念を構成する3つの側面とされる対人的, 個人的, 自己資源活用的側面を併せ持ち, 集団内で発生する負の出来事を抑制, 予防することが予測される. また, チームのメンバー個々がスポーツ・セルフマネジメントスキルを獲得することにより, 結果として, 集団凝集性, 集団効力感に正の影響を与えることも予測される. 同スキルによる集団効力感への影響について補足すると, スポー

ツ・セルフマネジメントスキルは、選手自身が主体的に思考・行動し、実践する自己活用力であり、スキルの獲得によって「その行動を達成できるかどうかの確信」である自己効力感に正の影響を及ぼすことが考えられる。また、Bandura (1997) は、メンバー個々の自己効力感の総計を、チームの集団効力感としても扱うことができるとしていることから、自己効力感を介した集団効力感の高まりも関連性として予想される。図1は、スポーツ・セルフマネジメントスキルと集団凝集性、集団効力感等との関係を、仮説モデルとして示したものである。

また、これまでの集団研究では、集団凝集性や集団効力感と関連すると考えられる、集団における選手個人の能力の測定に焦点を当てた尺度は未だ開発されていない。集団凝集性や集団効力感を高めることにつながる実践的示唆に加え、集団内の負の出来事の発生を個人レベルから予測、予防するためにも、スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度は、今後の集団研究の発展に寄与することができると考えられる。そこで、本

研究では、スポーツ集団における、選手個人のスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度の開発を目的とした。

尺度開発へ向けた手続きとしては、まず、関連する既存の尺度と自由記述調査から、スポーツ集団におけるスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する項目を収集・作成し、予備調査を通じて項目群を精選、その結果をもとに本調査で使用する項目を選定する。次の本調査では、実際にスポーツ集団におけるスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度を構成し、その信頼性と妥当性を検証する。

予 備 調 査

目的

予備調査の目的は、関連する既存尺度と自由記述調査をもとに、スポーツ集団におけるスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する項目を収集・作成し、予備調査を通じてそれらの項目を精選、本調査で使用する項目を選定することである。

方法

調査対象 神奈川県内における、関東大学リーグ1部から6部に所属する3大学5チームの学生に対して調査を実施し、そのうち126名（男性84名・女性42名、4年生15名・3年生41名・2年生44名・1年生26名、平均年齢 19.36 ± 0.94 歳）を分析の対象とした（回収率63%）。競技種目はサッカー、テニス、ソフトテニス、卓球であった。本研究では競技集団としての目標がより明確であると考えられる体育会所属運動部員を対象とし、同好会（サークル）に所属する学生は対象外とした。

調査時期 調査は2009年9月から10月にかけて実施された。

手続き 本研究者自ら、または運動部の指導者や主将、主務などの代表者によって調査実施に関する教示を行い、一斉法による集団実施、または個別（個人）形式による実施の後に返送してもら

図1 スポーツ・セルフマネジメントスキルとその関連要因間の関係性を示す本研究の仮説モデル

った。また、「回収した個人の回答は全体的な傾向を分析検討するという目的のみに使用」、「回答は無記名で行い、個人を特定するものではない」という説明を口頭で行い、同意を得た上で回答を得た。

既存尺度からの項目収集と作成 スポーツ・セルフマネジメントスキルを測定するための項目は、スポーツ選手としての心理的成熟度尺度（杉浦，2001）、スポーツにおける個人・社会志向性尺度（磯貝ほか，2000）、競技状況スキル尺度（上野・中込，1998）などの既存の尺度を参考にして作成された（計61項目）。個々の項目の評定は5段階の自己評定（1：そう思わない，2：あまりそう思わない，3：どちらともいえない，4：ややそう思う，5：そう思う）により実施した。評定値が高いほどスポーツ・セルフマネジメントスキルが高く備わっていると解釈される。

内容的妥当性の検討 収集、作成された項目群は、本研究者とスポーツ関連分野に所属する大学教員5名と大学院生3名、また、それ以外の分野に所属する大学教員1名によって、「項目内容が集団に所属する選手個人のマネジメント能力を反映したものであるか」などの内容的妥当性について慎重に検討された。

自由記述調査における教示 「『チームに所属することで獲得できる能力』とはどのようなものですか」という問いに対して、中学・高校・大学時代それぞれの運動部活動の経験をもとに自由記述による回答を求めた。スポーツ・セルフマネジメントスキルは先天的な能力ではなく、集団に所属する中で獲得し高めていくことのできる後天的な能力と考えられるため、このような教示を行った。

収集された記述の精選方法 自由記述により得られた回答をキーワード化する際に、本研究では、学生全般に適用される一般的な能力の抽出を試みているため、キャプテン経験者からの回答をもとに作成された「リーダーシップ」というキーワードは除外することにした。その他にも、「思いやり」や「気配り」、「礼儀」等の対人的な多数のキーワードのうち、「コミュニケーション」はそれら対人的キーワードの高次に位置付くと考え

られるため除外した。また、「協調性」というキーワードも、「集団内の規則や周囲の意見への過度な同調」、「他者と同じことで安心感を得る」という負の側面が含まれると考えられるため除外することにした。

結果と考察

因子の抽出 既存尺度の項目を参考に作成した61項目における因子構造を事前に確認しておくため、項目群に対して探索的因子分析（主因子法・Promax回転）を実施した。抽出される因子は相互に関連し合っていると考えられるため、分析自体は斜交回転により行った。この因子分析の仕様は後述の本調査においても同様とした。因子分析の結果からは、「チーム価値（例：チームは必要不可欠な存在である）」、「チームへの貢献（例：チームに貢献するために個人力をあげる努力が、自分の成長につながる）」、「平等性（例：全体ミーティング等で学年問わず意見を出し合う）」、「信頼関係（例：衝突しても問題解決することで信頼関係が深まる）」、「チーム規範（例：チーム経験から社会性を獲得することができる）」、「課題達成（例：全体で取り組むことで厳しい練習や試合を乗り越えることができる）」、「相互作用（例：双方向からのコミュニケーションができる）」、「チーム支援（例：裏方に回ってサポートすることができる）」、「誠実の態度（例：環境に感謝することができる）」、「経験共有（例：楽しい経験を共有することができる）」、「他者理解（例：良きライバルであり、良きチームメイトである）」といった集団の中での他者との関わりを示す11因子が抽出された。各因子の α 係数の値は.71—.94の範囲であり、全体的に因子の内的一貫性は確保されていることが示された。

自由記述の精選 合計で114の記述を得たが、「同じ目標に向かって頑張る力」を「目標共有」というように、文章化されている記述をキーワード化した結果、1つの文章から複数のキーワードが抽出されたものもあり、最終的に182のキーワードが得られた。自由記述の結果からは、「主体性」、「自己内省」、「創意工夫」といった個人的

な要素を含むキーワードを中心に11カテゴリーに分類された。なお、個人の課題達成やチームでの目標共有といった内容に対して、具体的に日々の繰り返しを問い可視化することが重要であると考え、「継続的取り組み」カテゴリーを新たに追加した。主体性を持ち、競技力向上のためにどのように取り組むかを考えることが競技への意欲向上にも繋がり、さらなる継続性と競技力向上を生み出すためである。スポーツと音楽の違いはあるが、バイオリニストやピアニストを対象として、プロレベルのエキスパートパフォーマンスを獲得するために必要とされる計画的な練習 (Deliberate practice) の役割を調査した研究では、最低でも10年間の厳しい練習を長期的に行う必要性を述べており (Ericsson et al., 1993)、一流になるための継続した練習の重要性を説明している。また、「自己内省」としてキーワード化された回答は2つのみであったが、OECDによるDeSeCo

プロジェクトの中にあるキー・コンピテンシーという概念の根底にある思慮深さ (反省性) という考えにあるように、技術向上にも集団の中での人間的成長にも重要であると判断し、カテゴリーとして位置付けることにした。自由記述から得られた11カテゴリーに、「継続的取り組み」を加えた12カテゴリー (表1) では、チームとの関わりの中で得られるもの、所属することにより自己の成長を得られたもの、目標を共有するという経験から得られたものなど、集団としてかつ個人としての両側面から構成されるということが明らかになった。

予備調査の自由記述と因子分析の結果から、対人的、個人的、資源活用の側面からなる12カテゴリーと仮説を立て項目を再検討した。最終的に、1カテゴリーあたり5—8項目の、スポーツ・セルフマネジメントスキルを測る75項目が作成された。

本 調 査

表1 自由記述から抽出されたキーワードの例と12カテゴリー分類結果

抽出されたキーワードの例	カテゴリー名
チームへの貢献 チームワーク	チームへの貢献
目標共有 組織力形成	目標共有
部員一人ひとりを尊重 人間関係構築	他者受容
積極性 自主性	主体性
計画性 問題発見	創意工夫
粘り強さ 持久力	達成努力
ルール 礼儀	規範
思いやり 気配り	誠実的態度
常識力 社会性	自己規範
努力 競争心	目標設定
自己の見直し	自己内省
†追加されたカテゴリー	継続的取り組み

目的

本調査の目的は、スポーツ集団におけるスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度を構成し、その信頼性と妥当性を検証することである。

方法

調査対象 関東地区11大学における関東大学リーグ1部から4部のチームに所属する学生に対して調査を実施し、そのうち603名 (男性306名・女性297名、集団種目13チーム322名・個人種目22チーム281名、平均年齢 19.26 ± 1.08 歳) を分析の対象とした (回収率73%)。表2には、本調査における調査対象者が所属する種目の一覧を示している。男女、競技種目の比率、また、競技レベルにおいては関東大学リーグと全国大会での順位を基準に、全国大会上位 (1—3位) と関東リーグ1部校、関東リーグ2, 3部校、関東リーグ4部以下という3つの層に分類し、それぞれがほぼ同等となるようにした。個人種目は団

表2 本調査で対象となった運動部種目

運動部名	人数	
テニス	142	(7校13チーム)
硬式野球	100	(2校2チーム)
バスケットボール	100	(3校4チーム)
ソフトテニス	73	(3校3チーム)
バレーボール	49	(3校4チーム)
サッカー	23	(1校1チーム)
アメリカンフットボール	36	(3校3チーム)
陸上	29	(1校1チーム)
バドミントン	21	(1校1チーム)
水球	14	(1校1チーム)
フェンシング	10	(1校1チーム)
トライアスロン	6	(1校1チーム)
合 計	603	35チーム

体戦（関東大学リーグまたは全国における順位）での結果をもとにチーム所属レベルを決定した。

調査時期 調査は2010年10月から2011年1月にかけて実施された。

手続き 調査票を各調査協力校の指導者または主将、主務などに郵送し、一斉法による集団実施、または個別（個人）形式による実施の後に返送してもらった。本研究者自ら、または運動部の指導者や主将、主務などの代表者により、調査実施に関する教示を行ってもらった。調査票の冒頭には「回収した個人の回答は全体的な傾向を分析・検討するという目的のみに使用します」、「回答は無記名で行い、個人を特定するものではありません」という説明書きをし、同意を得た上で回答を得た。また、回答時の負担を減らすために妥当性を検証するための項目群を2つに分け、A、Bという2種類の調査票を作成して調査を実施した（A回答者305名、B回答者298名）。

調査内容①：フェイスシート 性別、学年、種目、現在のチームにおけるポジション（レギュラー・非レギュラー・両方に該当）について、対象者全員に回答を求めた。

調査内容②：スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する項目 対象者全員に、予備調査を通じて選定されたスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する75項目（12側面を想定）を実

施した。項目の評定は予備調査と同様の5段階の自己評定で行い、評定値が高いとき、スポーツ・セルフマネジメントスキルが高く備わっていると解釈される。

調査内容③—⑧：妥当性を検討する既存尺度 予備調査で想定されたスポーツ・セルフマネジメントスキルのカテゴリーが実際に因子として抽出された際に、それらの妥当性を表3に示す既存尺度をもとに検証していくこととした。調査内容③の「スポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度」（村上ほか、2003）からは、「主体性」と「自己内省」の妥当性を検証する目的で「個性の発揮」と「危機回避能力」を採用した。調査内容④の島本・石井（2006）による日常生活スキル尺度（大学生版）からは「計画性」と「情報要約力」を採用し、「課題改善」と「創意工夫」との関連性をみた。調査内容⑤では、スポーツ選手としての心理的成熟度評価尺度（杉浦、2001）の「自律的達成志向」と「明確な目的」を、「目標設定」と「継続的取り組み」との関連性の検証で、調査内容⑥の島本・石井（2008）による運動部活動経験評価尺度（大学生用）からは「周囲からのサポート」と「努力忍耐」を、「誠実な態度」と「達成努力」との関連性をみる目的でそれぞれ採用した。調査内容⑦では、本郷（2005）によって作成された中学生の学級における集団効力感尺度における「集団相互支援効力感」と「集団結束効力感」を、「他者理解」と「チーム支援」との関連性と、スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度全体との妥当性を検証する目的で採用した。そして、調査内容⑧においては、Carron et al.（1985）によって作成された集団環境質問紙の4因子を「チーム規範」と「チームへの貢献」との妥当性を検討するために用いた。また、スポーツ・セルフマネジメントスキルは、負の出来事を防止・抑制し、集団凝集性や集団効力感に正の影響を与え、集団の競技パフォーマンスにも正の影響を及ぼすと考えられるため、集団の所属レベルとの関連性を検討することにした（図1）。

統計ソフトと適合度指標 本研究におけるすべての分析は、統計ソフトのSPSS Statistics 17.0

表3 スポーツ・セルフマネジメントスキルとして抽出された因子の妥当性を検証するための既存尺度と予想される関連性

	妥当性検証因子/項目	尺度の説明と予想される解釈	項目評定	
調査内容③	スポーツ選手のメンタル評価尺度	「主体性」と「自己内省」のカテゴリーと「個性の発揮（例：プレッシャーを克服するのに自分なりの対策を持っている）」、「危機回避能力（例：調子が悪い時でも悪いなりに自分のプレーをすることができる）」を、妥当性を検討するための項目群とした。	スポーツ選手のメンタルヘルスに関する村上ほか（2003）の研究をもとに作成したスポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度。「個性の発揮」評定値が高いほど、スポーツ活動時における個性の発揮が認められる。「危機回避能力」は直面する問題に対しての対応力が高い。	1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: どちらともいえない 4: ややそう思う 5: そう思う
調査内容④	日常生活スキル尺度（大学生版）	「計画性（例：先を見通して計画を立てることができる）」と「情報要約力（例：手に入れた情報をを使って、より価値の高いもの（資料等）を生み出せる）」の2つを採用し、前者を「課題改善」カテゴリー、後者を「創意工夫」カテゴリーの妥当性を検討するための項目群とした。	島本・石井（2006）による大学生のライフスキルを評価する尺度。「計画性」評定値が高いほど物事や目標に取り組み際の計画性が高く、「情報要約力」評定値が高いほど、大量の情報の中から重要なものを選び出し再構成する力を備えている。	1: ぜんぜん当てはまらない 2: あまり当てはまらない 3: わりと当てはまる 4: とても当てはまる
調査内容⑤	スポーツ選手としての心理的成熟度評価尺度	「自律的達成思考」（例：誰に言われなくても自発的に練習に取り組んでいる）と「明確な目的」（例：自分がなぜスポーツをしているのかその理由がわかっている）の2つを採用し、前者を「目標設定」カテゴリー、後者を「継続的取り組み」の妥当性を検討するための項目群とした。	杉浦（2001）による、スポーツ場面における心理的適性の獲得としてのパーソナリティ変容プロセスを明らかにする目的で作成された尺度。評定値が高いほど、日々の練習や目標に対して自発的な志向や目標を明確に持っていると解釈できる。	1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: どちらともいえない 4: ややそう思う 5: そう思う
調査内容⑥	運動部活動経験評価尺度（大学生用）	「周囲からのサポート（例：プレーや日常生活のことに関して、メンバーからアドバイスを受けた）」と「努力忍耐（例：厳しい練習も、最後まで手を抜かず全力でやり抜いた）」の2つを採用し、前者を「誠実な態度」カテゴリー、後者を「達成努力」カテゴリーの妥当性を検討するための項目群とした。	島本・石井（2008）による、大学運動部活動の場面におけるスポーツ経験を評価する尺度。評定値が高いほど、「周囲からのサポート」ではチームのメンバー等から支援を受ける経験が多く、「努力忍耐」では日々の辛く厳しい練習にも忍耐強く打ちこんだ経験が多いと解釈される。	1: はほとんどなかった 2: たまにあった 3: ときどきあった 4: よくあった
調査内容⑦	集団効力感尺度	「集団相互支援効力感」（例：私たちは何かをするとき、皆で十分に話し合って決められると思う）、「集団結束効力感」（例：私達は皆で取り組めば、何でも上手く行えると思う）」を、「他者理解」、「チーム支援」カテゴリーの妥当性を検討するための項目群とした。また、スポーツ・コンピテンシー尺度全体との相関をみるための尺度と設定した。	Bandura（1986）や、Zaccaro et al.（1995）によって定義された集団効力感の概念をもとに、本郷（2005）によって作成された、中学生の学級における集団効力感尺度。評定値が高いほど、お互いに支えあうことができること、集団が結束・協力することについての予測見込みが高いと解釈することができる。	1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: どちらともいえない 4: ややそう思う 5: そう思う
調査内容⑧	集団環境質問紙	個人にとっての集団の社会的魅力、個人にとっての集団の課題的魅力、集団の社会的統合、集団の課題的統合を、「チーム規範」、「チームへの貢献」、カテゴリーの妥当性を検討するための項目群とした。	凝集性を測定する尺度としてCarron et al.（1985）によって作成された集団環境質問紙。評定値が高いほど、個人の集団に対する課題的、社会的側面の魅力が高く、集団の課題、社会的側面によって集団が統合される期待も高いと解釈される。	1: 強くそう思う 5: どちらともいえない 9: 強くそう思わない

とAmos17.0を用いて行い、有意水準は5%とした。また、尺度の因子分析モデルのデータへの適合度は、GFI（Goodness of Fit Index）、AGFI（Adjusted GFI）、CFI（Comparative Fit Index）、RMSEA（Root Mean Square Error of Approximation）の各指標から検証した。

結果と考察

項目分析 項目の平均値（1.5—4.5を基準）から回答の偏向を調べた。平均値が極端にかたよっていることは、大多数の被験者が同じ回答であるということであり、個人差を測定する尺度としては意味をなさないためである（鎌原，1998）。結果から、すべての項目は基準内の数値であった。また、I-T相関（ $r=.20$ 以上を基準）においても、すべての項目が基準を満たしていた。項目間相関をみたところ、「チームの一員としての自覚を持

って行動している」と「チーム目標を強く意識して練習に取り組んでいる」の項目間に $r=.71$ （ $p<.001$ ）という高い正の値の相関係数がみられたため、項目を除外した際の α 係数の値の増減をもとに判断し、前者を除外することにした。

因子の抽出 74項目に対して因子数を「12」と指定した探索的因子分析を実施した。因子負荷量.40以上、単純構造を基準に検討を行った結果、解釈可能性から8因子解を選択した。この段階で、因子負荷量が低い項目や、複数の項目に一定の因子負荷量を示している項目として計25項目が除外された。また、データへの適合度、尺度としての利便性の観点から、1因子あたりの項目数を「4」に統一することを試みた。項目数が4項目以上の3因子においては、因子負荷量の高い順から項目を採用することにし、因子負荷量が同等の項目については、当該項目を除外する前後

表4 スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する項目群の最終的な因子パターン行列 (n=603)

項目	平均値	SD	因子							
			F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8
F1 チームへの貢献 (α=.83)										
チームの一員としての自覚を持って行動している	4.33	.82	.79	.02	-.02	.00	-.04	.11	-.06	.00
チーム目標を強く意識して練習に取り組んでいる	4.24	.83	.78	-.01	.11	.01	-.09	.02	.04	-.06
チーム目標を達成する為に計画された、日々の練習テーマを理解して取り組んでいる	4.08	.79	.53	-.03	-.04	.02	.07	.12	.16	.02
チームに貢献する為の自分の役割を考えることができる	4.15	.85	.51	.12	-.04	-.03	-.02	-.04	.04	.23
F2 思考力 (α=.77)										
理解したことを、人にわかりやすく言葉で説明することができる	3.34	.97	.11	.88	-.13	-.03	-.12	.03	-.15	.01
人に理解してもらえよう、自分自身で考えた意見を述べるができる	3.60	1.01	-.05	.67	.11	.04	.11	-.14	.06	-.05
自分の考えを整理して、文章にすることができる	3.46	1.04	.01	.66	-.12	.15	.01	.01	-.04	.02
難問に直面しても解決策を見いだすことができる	3.38	.89	-.12	.46	.13	-.11	.18	.04	.16	.01
F3 自己内省 (α=.78)										
失敗を振り返り、反省点を活かすことができる	4.01	.80	.06	-.10	.85	.05	.02	-.03	.00	-.08
指導者や先輩に言われたこと以外にも、自ら考えて行動している	4.18	.88	.07	-.03	.74	-.05	-.07	-.03	-.05	.06
アドバイスを元に自分で考えることができる	4.05	.77	-.10	-.03	.57	-.08	-.11	.05	.27	.14
決められたルール以外にも、自分で判断して行動できる	3.86	.82	-.09	.32	.40	.07	-.08	.11	-.01	.02
F4 誠実的態度 (α=.72)										
誰に対しても感謝の気持ちを持って接することができる	4.26	.82	.02	.03	.04	.65	.06	.13	-.04	-.08
環境・人・物を大切にすることができる	4.31	.76	-.07	.06	-.10	.57	-.11	.10	.19	.07
チーム内の誰に対しても配慮して行動している	3.91	.87	.06	.03	-.06	.49	.07	-.09	.10	.04
役割、学年等に関係なく仲間を認めることができる	4.33	.82	.26	-.02	.18	.39	.00	-.16	.04	-.01
F5 継続的取り組み (α=.66)										
個人目標を達成する為に、短期、中期、長期等の段階的目標を設定している	3.40	1.02	.12	.03	-.06	-.02	.65	-.14	.07	.11
毎日継続して行っている自主練習（トレーニング）等がある	3.33	1.26	-.15	-.16	.06	.08	.59	.16	-.12	.09
毎日練習記録を書いている	2.54	1.43	-.09	.08	-.22	-.01	.54	.07	.11	-.08
目標に対してスケジュールを立てて行動している	3.55	.97	.11	.09	.30	-.02	.44	.08	-.21	-.02
F6 達成努力 (α=.80)										
目標に向けて諦めずに努力することができる	4.24	.77	.07	-.06	.05	.02	.04	.70	.04	-.08
失敗を成功に繋げる為に努力を惜しまない	4.01	.84	.01	-.08	-.15	.08	.06	.66	-.03	.18
目標に対する通過点であると思えば、どんな辛いことにも耐えることができる	3.95	.97	.09	-.04	.05	-.05	.09	.63	.06	-.07
上手くいかないことに對しても、何度でも続けて挑戦することができる	3.92	.84	.01	.21	.11	-.02	-.05	.60	-.03	-.08
F7 課題改善 (α=.74)										
何が原因で注意を受けたかを理解することができる	4.11	.77	.00	-.06	-.07	.06	-.06	.09	.67	.03
注意を受けたことは繰り返さないようにしている	4.12	.76	.06	-.08	.10	.12	.03	-.14	.57	-.06
自分の言動に対して責任を持っている	4.03	.87	.06	-.01	.00	.08	.07	.09	.52	-.01
疑問点があれば、解決しようと試みることができる	4.14	.76	.05	.07	.19	-.03	-.01	.12	.42	-.03
F8 創意工夫 (α=.72)										
自分の長所をどうにかしていくか常に模索している	3.93	.93	.04	-.03	-.03	-.01	.07	-.09	-.03	.67
自分なりの取り組み方を探し出すことができる	3.90	.84	-.01	-.04	.18	.11	-.06	.14	-.12	.52
試合でベストパフォーマンスを発揮できるように、準備をすることができる	3.99	.87	-.03	.07	.03	-.07	.09	.03	.13	.49
一つの課題に対して様々な視点から考えて練習している	3.86	.82	.00	.13	.02	.01	-.01	.06	.02	.47
因子間相関			F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8
				.55	.40	.60	.29	.58	.57	.50
					.47	.45	.32	.57	.58	.53
						.36	.42	.47	.45	.53
							.25	.55	.58	.45
								.44	.31	.46
									.58	.59
									.52	

† 因子間相関はいずれも $p<.001$ †† 尺度全体の α 係数は.93

での α 係数の増減をもとに採用する項目を判断した。この作業により計17項目が除外された。その後、32項目に因子数8による探索的因子分

析を再度実施したところ、「誠実の態度」を構成する項目「役割、学年等に関係なく仲間を認めることができる」のみ因子負荷量が .39 という値で

あったが、それ以外の各項目は .40以上の値であるとともに4項目からなる単純構造を示した。

なお、性別と競技種目別（個人種目、集団種目）、チームにおけるポジション（レギュラー171名、非レギュラー350名、両方に該当79名）ごとでも探索的因子分析を行ったが、いずれの場合も全体とほぼ同様の因子構造となった。表4には、全体での最終的な因子パターン行列を示している。

因子の命名 表4にあるように因子の命名を行った。第1因子は、チームの一員として目標に向かってどのように取り組むかを考える項目に高い因子負荷量を示しているため「チームへの貢献」と命名した。第2因子は、自らの思考を表現するために、言語という資源を用いて説明や文章化するという項目の集まりから「思考力」とした。第3因子では、失敗や他者からの助言、ルールといったものに対して批判的な思考をもって考えるという項目から構成されているため「自己内省」とした。第4因子は、チームの成員に対しての配慮や環境に対して感謝する項目から構成されており「誠実の態度」と命名した。第5因子は、目標を達成するための計画や日々の継続性を説明する項目であり「継続的取り組み」と命名した。第6因子は、目標や成功に向けて耐えて努力するという項目からなるため「達成努力」と命名した。第7因子では、自分自身の思考や行為に対して基準を設けている項目と読み取れるため「課題改善」とした。第8因子は自分自身の個性（長所）を資源として課題に対して多面的な方法による行動を表しており「創意工夫」と命名した。

適合度の検討 8因子モデルのデータへの適合度を、確認的因子分析により検証した。いずれの指標からも十分な適合（GFI=.90, AGFI=.88, CFI=.92, RMSEA=.05）を支持する値が得られたため、本研究では1因子あたり4項目からなる8因子モデルを、尺度における因子構造として採用した。

因子間相関 すべての因子の間には $r=.25$ — $.60$ の範囲で有意な正の値の相関係数が認めら

れており（表4）、因子分析において斜交回転を採用したことは妥当な判断であったといえる。最も相関係数が高く示されたのは「チームへの貢献」と「誠実の態度」であった。チームに貢献しようとするチームの一員としての自覚が高いほど、チームの成員へ配慮する意識も高い状態にあることが示された。

予備調査の結果との差異 予備調査の結果から、スポーツ・セルフマネジメントスキルは12のカテゴリーから構成されると仮説を立てたが、探索的因子分析の結果からは、「チームへの貢献」、「チーム支援」、「他者理解」の項目が「チームへの貢献」となるなど、複数のカテゴリー内の項目が統合され因子として抽出された。しかしながら、本調査の分析から得られた8カテゴリーは、対人的な側面に関するいくつかの仮説項目が統合されたことによるものであり、予備調査から得られたデータがより凝縮され、一般化された結果であるといえる。また、対人的な能力、個人的な能力に加え、環境（目標、課題、人間関係など）との相互作用に必要なスキルである資源の活用スキルが得られたといえる。本研究では尺度開発の方針として、自己の知識や経験を資源というカテゴリーで捉え、それらをどのように活用していくかというマネジメント能力の顕在化を試みた。最終的に得られた8カテゴリーは、対人的側面2因子（チームへの貢献、誠実の態度）、個人的側面4因子（自己内省、継続的取り組み、達成努力、課題改善）、資源活用の側面2因子（思考力、創意工夫）からなり、OECDのキー・コンピテンシーの3カテゴリーの概念に対応し（DeSeCo/OECD Executive summary, 2005；ライチェン・サルガニク, 2008）、尺度の妥当性を支持する結果の1つと考えられる。

信頼性の検討 α 係数をもとに各因子の内的一貫性の検討を行った。その結果、「チームへの貢献」では.83、「思考力」では.77、「自己内省」では.78、「誠実の態度」では.72、「継続的取り組み」では.66、「達成努力」では.80、「課題改善」では.74、そして、「創意工夫」では.72という値がそれぞれ得られた。一部、経験的基準

の.70を下回るものもみられたが、各因子の内的一貫性は概ね確保されていることが示された。尺度全体の α 係数は.93であった。

妥当性の検討 尺度における8因子と、既存尺度との相関関係($r=.20$ 以上を基準)から妥当性を検証した(表5)。まず、全ての因子と集団効力感を測定する尺度との間に有意な正の相関関係が認められた。特に、対人能力を表す「チームへの貢献」と「誠実の態度」の因子は、「集団相互支援効力感」、「集団結束効力感」との間にそれぞれ $r=.40$ 以上の正の値の相関係数がみられ、集団の成員の対人能力としての妥当性が示されたといえる。集団凝集性との間には、「個人にとっての集団の社会的魅力」と「集団の課題的統合」との全ての因子間に正の値の相関係数がみられた。個人が集団に所属することによって得られる社会的側面としての魅力と、集団の課題的な統合に繋がる能力としての妥当性が得られる結果となった。他の2因子との間に相関関係が認められなかった要因としては、「個人にとっての集団の課題的魅力」を構成する項目において、「私はもっと試合に出場したいと思っている」、「所属しているチームは私の個人能力を向上させるために必要なチャンスを与えていない」など、否定的かつ強硬的な表現からなるため、現代の学生に合致しないことが考えられる。また、「集団の社会的統合」因子を構成する項目では、「チームで一緒に行動するよりも、1人で行動することが多い」、「オフシーズンもチームで行動することが多い」など、常習的に行動することを問う項目からなっており、長時間過ごしている部活動以外の時間は、それぞれの時間を過ごしていることが回答となって表れたと想定される。

個々の因子ごとにみても、第1因子「チームへの貢献」は、集団における対人スキルであり、集団環境質問紙の4因子との間に正の相関関係がみられると予想された。「集団の課題的統合」($r=.43$, $p<.001$)と中程度の正の相関関係が認められたことから、目標を共有する意識が高い時、集団としての課題的な凝集性も高いと解釈できる。第2因子の「思考力」は、「情報要約力」

表5 スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度と既存尺度との相関分析の結果

	個性の発揮	危機回避能力	努力忍耐	自律的達成志向	明確な目的	計画性	情報要約力	周囲からのサポート	集団相互支援効力感	集団結束効力感	個人にとっての集団の社会的魅力	個人にとっての集団の課題的魅力	集団の社会的統合	集団の課題的統合
チームへの貢献	.50***	.34***	.38***	.53***	.47***	.18**	.28***	.28***	.43***	.45***	.37***	-.15**	-.15*	.43***
思考力	.54***	.52***	.31***	.45***	.40***	.43***	.51***	.06	.19**	.16**	.16**	.03	-.01	.18**
自己内省	.52***	.44***	.38***	.53***	.39***	.21***	.39***	.11	.18**	.22***	.33***	-.03	-.12*	.29***
誠実の態度	.41***	.30***	.31***	.58***	.45***	.28***	.30***	.34***	.42***	.41***	.30***	-.25***	-.19**	.34***
継続的取り組み	.61***	.44***	.34***	.50***	.29***	.40***	.37***	.15**	.15*	.16**	.12*	.05	.07	.22***
達成努力	.57***	.49***	.52***	.75***	.57***	.38***	.41***	.22***	.34***	.33***	.30***	-.08	-.09	.34***
課題改善	.58***	.40***	.39***	.51***	.40***	.23***	.33***	.25***	.31***	.30***	.32***	-.08	-.22***	.31***
創意工夫	.67***	.62***	.39***	.62***	.55***	.38***	.51***	.17**	.25***	.27***	.28***	.03	-.04	.34***
尺度得点									.38**	.39**	.36**	-.07	-.11	.41**
調査票区分	A	A	A	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

†† 調査票 A n=305, 調査票 B n=298

($r=.51, p<.001$), 「計画性」($r=.43, p<.001$)との間に中程度の正の相関関係がみられたことから, 自己のもつ資源を言語や行動によって活用する能力が備わっているとき, 必要な情報を獲得する能力や計画性も備わっていることが示された. 第3因子「自己内省」は, 「危機回避能力」との間に中程度の正の相関関係($r=.44, p<.001$)が認められた. 批判的な思考で物事を考えることができるとき, 危機的場面での解決能力も高いと考えられる. 第4因子「誠実的態度」は, 「周囲からのサポート」との正の相関関係が予想され, 実際に弱い正の相関関係($r=.34, p<.001$)がみられた. 周囲から受ける助言などに対する感謝の気持ちが高いとき, 周囲への配慮などの意識も高いと解釈できる. また, 「誠実的態度」は「集団相互支援効力感」($r=.42, p<.001$), 「集団結束効力感」($r=.41, p<.001$), との間にもそれぞれ中程度の正の相関関係が認められ, 当該因子の対人能力へのカテゴリー分けは妥当であったといえる. 第5因子の「継続的取り組み」は「目標設定」と「継続的取り組み」が統合された因子であり, 目標を達成するための継続性という項目群から構成されているため, 「自律的達成志向」と正の相関関係にあると予想された. 実際に中程度の正の相関関係($r=.50, p<.001$)が認められたことから, 目標に対しての継続性が高いと

き, 自律的な達成志向も高い状態にあると解釈できる. 第6因子「達成努力」は, 「努力忍耐」と正の相関関係にあると予想され, 実際に中程度の正の相関関係($r=.52, p<.001$)が認められた. 厳しい練習に耐え目標を達成することへ努力し続けるという意識が高いとき, 努力や忍耐力も高いことが示された. 第7因子の「課題改善」においては, 「計画性」と正の相関関係がみられると予想され, 実際に弱い正の相関関係($r=.23, p<.001$)が認められたことから, 自己の持つ課題への改善意識が高いとき, 計画性も高いことが示された. そして, 第8因子の「創意工夫」では「情報要約力」との関連性が予想された通り, 実際に中程度の正の相関関係($r=.51, p<.001$)が認められ, 妥当性が支持された. 様々な情報を得て自己の判断で多様な場面で対応する能力が高いとき, 情報要約力も高く備わっていると解釈できる. 本尺度を構成する8因子全てにおいて $r=.20$ 以上の有意な正の値の相関係数が得られた.

次に, チーム所属レベルからスポーツ・セルフマネジメントスキル8因子の得点の比較を行った(表6). その結果, 「誠実的態度」において関東4部以下所属チーム群が, 関東2, 3部所属チーム群を上回ったが, その他の7因子においては, 全国大会上位(1-3位)と関東リーグ1部校, 関東リーグ2, 3部校, が関東リーグ4部

表6 チーム所属レベルからみたスポーツ・セルフマネジメントスキルの比較結果

	1: 関東1部/全国上位所属 (n=293, 13チーム)		2: 関東2, 3部所属 (n=170, 10チーム)		3: 関東4部以下所属 (n=140, 12チーム)		F 値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
チームへの貢献	17.14	2.70	16.61	2.69	16.32	2.48	5.15**	1, 2>3
思考力	14.20	3.05	13.57	2.82	13.15	3.05	6.41**	1, 2>3
自己内省	16.38	2.52	15.98	2.67	15.70	2.41	3.63*	1, 2>3
誠実的態度	17.03	2.25	16.46	2.68	16.74	2.37	3.14*	1, 3>2
継続的取り組み	13.63	3.32	12.44	3.00	11.59	3.29	20.51***	1, 2>3
達成努力	16.58	2.59	15.76	2.64	15.57	2.84	8.79***	1, 2>3
課題改善	16.67	2.41	16.25	2.44	16.01	2.16	4.18*	1, 2>3
創意工夫	16.14	2.62	15.45	2.27	14.99	2.56	10.76***	1, 2>3
尺度得点	127.76	15.77	122.53	15.16	120.08	15.37	13.53***	1, 2>3

† F 値の自由度はいずれも 2, 600

†† * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

以下を上回り、スポーツ・セルフマネジメントスキルの得点も高いことが示された。したがって、妥当性検証の仮説どおり、スポーツ・セルフマネジメントスキルの高い個人が集まった集団は、優れた競技パフォーマンスが発揮されていることが示唆された。

また、各因子と集団の中で起こるとされる「負の出来事」やネガティブな要因との関連性をみると、他者が存在することで課題達成の動機づけが低下する「社会的手抜き」は、増加する条件としては、個人の努力を個別に評価することができない、課題への重要性を低いと考えている、成果に対する自分の貢献が余分であると考えているなどが挙げられるが（Karau and Williams, 1993）、「達成努力」、「チームへの貢献」によって、個々の目標に向けた取り組みに対して具体的な評価の提示、チームに対しての成員の貢献意識の明確化として影響が考えられる。

また、集団凝集性に影響をもたらす個人要因に含まれる「ネガティブな結果に対する責任感」、「不安」に対しては、目標に向けて継続的に取り組むことを評価する「継続的取り組み」により、結果にかかわらず、常に目標を見据えた取り組みへの繋がりが想定される。他にも考えられる負の出来事として、集団内で成員が集団の標準や期待と同一あるいは類似の行動をとる「同調」があるが、表面的に規範に従う「追従」としての同調により、スポーツ活動に対する「自発性」や「充足感の欠如」、さらには「同調による没個性化」がある。これに対しては「思考力」、「創意工夫」によって、各自が意思を持って思考し、他者との多様な意見の中で集団における決定を行うといった影響を及ぼすことが考えられる。同調と対極の位置にある規範に背く「逸脱」に対しては、「チームへの貢献」、「課題改善」、「誠実の態度」によって、自身がどのようにチームに貢献していくかを常に模索し、自身の思考や行為に対して基準を設け、環境や周囲への配慮を持つことで、逸脱行動回避へと繋がることが予想される。また、凝集度が高く、外部との接触が低い、独裁的なリーダーシップが存在する場合に、集団の決定が愚かで浅

慮になる事態になる「集団浅慮」や、論理的で適切な活動選択を行わず、愚かな決定をしてしまう「集団思考」に対しては、「自己内省」や「思考力」によって、失敗などに対して批判的な思考を持って自ら省み、自らの言葉によって発信することが、事態を緩和する効果として予想される。このように、本尺度を構成する因子は、集団で発生する負の出来事やネガティブな要因との間に関連性をもたらす可能性が示された。

フェイスシート上で回答を求めた種目区分やポジション、学年、性別という個人属性をもとに、スポーツ・セルフマネジメントスキル各因子への理解を深めるための分析を行った。結果を表7から表10に示す。まず、種目区分では、他の多くの選手と密接にかかわりながら日々の練習をしている集団種目が個人種目に比べてスポーツ・セルフマネジメントスキルが高く備わっていると予想された。その結果、「思考力」、「課題改善」において、集団種目が有意に高いことが示された。集団種目の成員は個人種目の成員に比べて、失敗や他者からの助言、ルールといったものに対して批判的な思考をもって考え、自分自身の思考や行為に対して基準を設けている傾向が高い結果であった。予測に反し、個人種目の方が有意に得点が高くなる因子は認められなかった（表7）。

ポジションでは、集団の中で自己をうまくマネジメントし、高い競技パフォーマンスを発揮して

表7 種目別からみたスポーツ・セルフマネジメントスキルの比較結果

	個人種目 (n=281)		集団種目 (n=322)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
チームへの貢献	16.61	2.47	16.97	2.82	1.62
思考力	15.86	2.64	16.33	2.45	2.26*
自己内省	13.77	3.01	13.78	3.02	0.04
誠実の態度	16.73	2.34	16.87	2.48	0.71
継続的取り組み	12.88	3.32	12.76	3.34	0.44
達成努力	16.11	2.64	16.12	2.75	0.07
課題改善	16.17	2.45	16.60	2.30	2.27*
創意工夫	15.50	2.51	15.83	2.59	1.59

† *p<.05

表8 ポジション別からみたスポーツ・セルフマネジメントスキルの比較結果

	1:レギュラー (n=171)		2:非レギュラー (n=350)		3:両方に該当 (n=79)		F 値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
チームへの貢献	17.24	2.47	16.64	2.68	16.63	2.96	3.08*	1>2
思考力	16.43	2.67	15.97	2.50	16.05	2.49	1.84	
自己内省	14.04	2.93	13.72	3.10	13.54	2.80	0.96	
誠実的態度	16.89	2.26	16.87	2.44	16.41	2.62	1.27	
継続的取り組み	12.97	3.32	12.83	3.35	12.47	3.34	0.61	
達成努力	16.60	2.51	15.90	2.75	16.14	2.74	3.89*	1>2
課題改善	16.60	2.20	16.29	2.44	16.50	2.49	1.00	
創意工夫	16.07	2.37	15.56	2.65	15.43	2.50	2.79	

† *p<.05

表9 学年別からみたスポーツ・セルフマネジメントスキルの比較結果

	1:1年生 (n=199)		2:2年生 (n=141)		3:上級生群 (n=263)		F 値	多重比較
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
チームへの貢献	16.29	2.54	16.30	2.76	17.46	2.58	14.77***	1, 2<3
思考力	15.62	2.40	15.91	2.62	16.59	2.55	8.92***	1, 2<3
自己内省	13.39	2.82	13.47	3.19	14.24	3.01	5.60**	1, 2<3
誠実的態度	16.53	2.41	16.66	2.34	17.08	2.44	3.24*	1<3
継続的取り組み	12.76	3.22	12.54	3.38	13.01	3.38	0.95	
達成努力	15.71	2.73	15.91	2.89	16.53	2.51	5.82**	1<3
課題改善	16.24	2.44	16.06	2.44	16.70	2.27	4.13*	2<3
創意工夫	15.23	2.68	15.57	2.61	16.07	2.37	6.43**	1<3

† 引退などの理由で少数であった4年生(95名)を,3年生(168名)と統合し上級生群とした

†† *p<.05 **p<.01 ***p<.001

いるレギュラー群の方が,非レギュラーや両方に該当する群に比べて,スポーツ・セルフマネジメントスキルが高くなると予想された。その結果,「チームへの貢献」と「達成努力」において,レギュラー群が非レギュラー群を有意に上回ることが示された。チームにおいて高い競技パフォーマンスを示すレギュラー群は非レギュラー群に比べて,チームの目標に対してどのように取り組むかを考え,目標や成功に向けて耐えて努力するスキルが高い傾向にあることが示された(表8)。

学年では,集団での活動年数が多く,多様な経験を数多く積んでいる上級生の方が下級生に比べ,スポーツ・セルフマネジメントスキルが高くなると予想された。その結果,「継続的取り組み」

を除く全ての因子において,3年生と4年生を合わせた上級生群が,1年生,2年生をそれぞれ上回る結果であった(表9)。

最後に性別では,t検定を行った結果,「チームへの貢献」,「誠実的態度」,「達成努力」,「課題改善」において,女性の方が男性よりも有意に得点が高いことが示された(表10)。

なお,本研究では,スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する各下位尺度の信頼性を,内的一貫性と安定性の両次元から再度検証するため,「追加調査」として運動部活動に参加する大学生を対象に2時点の縦断調査を実施することにした。

表10 性別からみたスポーツ・セルフマネジメントスキルの比較結果

	男性 (n=306)		女性 (n=297)		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
チームへの貢献	16.22	2.95	17.40	17.40	5.54***
思考力	15.92	15.92	16.30	2.36	1.82
自己内省	13.76	3.01	13.80	3.02	1.82
誠実の態度	16.16	2.58	17.47	2.04	6.92***
継続的取り組み	12.84	3.26	12.80	3.40	0.15
達成努力	15.63	2.89	16.62	2.39	4.57***
課題改善	15.92	2.58	16.89	2.04	5.10***
創意工夫	15.62	2.69	15.74	2.41	0.56

† *** $p<.001$

表11 スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する各下位尺度の信頼性 (n=87)

	α 係数		再検査信頼性係数(r)
	t ₁	t ₂	t ₁ →t ₂
チームへの貢献	.77	.84	.60
思考力	.79	.87	.72
自己内省	.79	.84	.67
誠実の態度	.75	.88	.64
継続的取り組み	.57	.71	.70
達成努力	.81	.85	.68
課題改善	.89	.77	.69
創意工夫	.69	.83	.61

† t₁: 2012年12月 (2013年2月), t₂: 2013年1月 (2013年3月)

†† 調査インターバル1ヶ月間

††† 再検査信頼性係数の値はいずれも $p<.001$

追 加 調 査

目的

追加調査の目的は、スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する各下位尺度の信頼性を、内の一貫性と安定性の両次元から再検証することである。

方法

調査対象 関東地区3大学の学生に対して調査インターバル1ヶ月間の2時点の縦断調査を実施し、すべての調査に不備なく回答した87名(男性52名・女性35名, 集団種目4チーム39名・個人種目4チーム48名)を分析の対象とした。

調査時期 調査は2012年12月から2013年3月の間にかけ、運動部ごとに実施された。

手続き 調査票の実施方法、教示、返送手順は本調査と同様に行われた。再調査では2回の調査結果を個人レベルで対応させる必要があるため、「記名式での実施は、2回の調査結果を個人レベルで対応させるためであり、個人を特定するものではない」という説明を口頭で行い、調査票の冒頭にも明記し、同意を得た上で回答を得た。

調査内容 予備調査、本調査を通じて作成されたスポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する32項目に対して回答を求めた。

結果と考察

分析の結果を表11に示す。まず、再検査信頼性係数(r)の値は、中程度、または強い正の相関関係を表す.60—.72の範囲の値であり(いずれも $p<.001$)、各下位尺度には十分な安定性が確保されていることが示された。また、 α 係数では、「継続的取り組み」のみが本調査において.70以上の値が得られていなかったが、2時点目において.70以上の値が確認された。その他の下位尺度では、いずれも.70以上の値が再現された。

以上、本調査の結果と合わせ、各下位尺度には概ね満足できる信頼性、妥当性が確保されていることが示された。また、本研究では、キー・コンピテンシーの概念をスポーツ集団に反映させ開発を行った本尺度を、「スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度(学生アスリート版)」と命名した。

総合的考察

本研究のまとめ

本研究では、運動部活動としてのチームに所属する学生に焦点をあて、「集団の競技パフォーマンスに影響を与える、選手自身が主体的に思考・

行動し、実践する自己活用力」と定義した、スポーツ・セルフマネジメントスキルを評価する尺度の開発を目的として主に2つの調査を実施した。第1に、予備調査では、既存の関連する尺度の項目を参考にし、また、自由記述調査を通じて得られた回答をもとに多数の項目を収集・作成し、精選の後に本調査で用いる項目群が選定された。第2に、本調査では、選定された項目群をもとにデータを収集し、因子分析を行った結果、キー・コンピテンシーの概念を構成する3つの側面である、「対人」、「個人」、そして、「資源活用」に関連する8つの因子が抽出された。

また、各々の因子には概ね満足できる信頼性、妥当性が確保されていることが示され、開発された「スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度(学生アスリート版)」は、スポーツ集団の集団凝集性や集団効力感に正の影響を及ぼす選手個人のマネジメント能力の具現化に繋がるとともに、今後の集団研究の発展に寄与することが期待される。

集団凝集性と集団効力感を高める可能性のある スポーツ・セルフマネジメントスキル

本研究では、集団凝集性と集団効力感という集団の特性を測定する既存の尺度とスポーツ・セルフマネジメントスキルの関連性をみたが、まず、集団効力感尺度における集団相互支援効力感と集団結束効力感の両因子とスポーツ・セルフマネジメントスキルの全ての因子間に相関関係が認められたことから、スポーツ・セルフマネジメントスキルが高いほど、お互いを支え合うことができること、集団が結束・協力することへの予測見込みも高いことが示された。特に「チームへの貢献」と「誠実的態度」との間に中程度の正の相関関係が認められたことから、スポーツ・セルフマネジメントスキルにおける対人的側面の2因子が、所属する集団に対する自信の高まりに深く関わっている可能性が示唆される結果となった。また、集団凝集性尺度における「個人にとっての集団の社会的魅力」と「集団の課題的統合」の2因子と、スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度の全ての因子との間に正の相関関係が認められ

たことから、スポーツ・セルフマネジメントスキルが高いほど、個人の集団に対する社会的側面の魅力と集団が課題的に統合されるという期待も高いと解釈することができる。他の2因子との間に相関関係が認められなかった要因としては、項目内容が否定的かつ強硬的な表現からなるため、現代の学生に合致しないことや、常習的に行動することへの回答をもとめる項目からなっており、長時間過ごしている部活動以外の時間の過ごし方はそれぞれの時間として活用していることが回答となって表れた結果と想定される。

チーム所属レベルからスポーツ・セルフマネジメントスキル8因子の得点の比較をした分析では、「誠実的態度」以外の7因子において、全国大会上位(1—3位)と関東リーグ1部校、関東リーグ2、3部校が、関東リーグ4部以下を上回る結果であった。スポーツ・セルフマネジメントスキルの高い個人が集まった集団は、優れた競技パフォーマンスが発揮されていることが示されたといえる。

今後も引き続き、尺度の妥当性を確認していく必要があるが、これら妥当性検証の結果は、本研究における仮説モデル(図1)の妥当性の一部を支持するものといえよう。

スポーツ・セルフマネジメントスキルの社会での活用

本研究では、社会人になる前の成長段階にある運動部活動に所属する大学生を対象にし、集団に所属する中で培われるマネジメント能力の具体像を明らかにすることを目的としたが、実際の社会に目を向けてみると、経済産業省が行った「企業の求める人材像調査」の中で、企業側が「主体性」、「問題発見力」、「働きかけ力」、「創造力」を強く求めているのに対して、若手社員にはそれらの能力が欠けているというデータが報告されている(経済産業省, 2007)。「自ら問題を発見する」、「創造して考える」、「他者に働きかける」という能力は、スポーツ・セルフマネジメントスキルでの「思考力」、「自己内省」、「創意工夫」などに通じるものであり、実社会での即戦力になるために

もスポーツ・セルフマネジメントスキルを活用させていくことの重要性がうかがえる。

2010年に文科省は、現在までの「スポーツ振興法」を見直し、新たにこれに代わる「スポーツ基本法」の検討を視野に入れ、「スポーツ立国戦略」として今後の日本におけるスポーツ政策の基本的方向性を示した（文部科学省，2010）。現代のスポーツをめぐる様々な課題を点検，検討を行った上で、「新たなスポーツ文化の確立」を目指し，人（する人，観る人，支える（育てる）人）の重視，連携・協働の推進を基本的な考え方としている。この中で，スポーツは社会的にコミュニケーション能力やリーダーシップの育成，克己心やフェアプレイ，チームワークの精神の涵養などの人間性の育成に資するとし，スポーツを通じた交流は，人間関係の希薄化の問題を抱える地域社会の再生に繋がると説明しており，スポーツを通じた人的相互作用の重要性を示しているといえよう。

また，「連携・協働の推進」では，トップアスリートが有する優れた技や人間的な魅力と，スポーツを通じて培ったコミュニケーション力やマネジメント能力を積極的に地域に還元することにより，スポーツへの参加意欲の向上や人材の好循環によるスポーツの活性化に寄与するとしているが，ここでいうマネジメント能力は，本研究で可視化に取り組んだスポーツ・セルフマネジメントスキルに通ずると想定される。また，セカンドキャリア問題として，トップアスリートがジュニア期に安心して競技に専念できるように環境を整備していくサポート提案がなされているが，これらはトップアスリートに限られた問題ではなく，運動部活動においての各人に対して，必要な認識になるのではないか。スポーツを行っている上で獲得されるマネジメント能力と表現されているが，まさにこれらは社会に反映可能なものであり，競技レベルに限らず有意性を強く説明していくことが必要であると考えられる。

大学アスリートのセカンドキャリアについて久保（2006）は，アスリートの活動を「キャリア」として捉えることに疑問を呈し，生きていくため

の真のキャリアについての準備の必要性を説いた。スポーツ集団という競技団体では，勝利追求は大学競技プログラムの使命とされ，過程よりも結果を出すことに向けられた活動が問題視されている。このような問題に対して，本研究では，結果を出すことを社会における集団の目標と捉え，スポーツ集団所属によって獲得したセルフマネジメントスキルの社会における有意性の説明を目指した。また，同時に，大学運動部活動集団の場合が学生の将来にとって，より有意義な場であることを実証する研究となるよう取り組んだ。

本研究における今後の主な課題と展望

本研究では，スポーツ・セルフマネジメントスキルという概念を定義し，集団凝集性と集団効力感，そして，集団の競技パフォーマンスに正の影響を与えるという新しい観点から，尺度の妥当性の検証を行ったが，今後は，縦断調査により，スポーツ・セルフマネジメントスキルと，集団凝集性に集団効力感，集団のパフォーマンス（競技成績）との因果関係を厳密に検証していくことが求められる。

内田ほか（2011）は，競技パフォーマンスと集団効力感との関連性は直接的なのか，あるいは何か媒介要因が存在するかについて統一的な見解がなく検討の余地が残されているとしているが，チームの競技パフォーマンス，集団凝集性，集団効力感と関連する，所属する個人に着目した研究に取り組むことにより，集団に与える媒介要因として新たな視点が見出されることが期待される。また，先行研究ではマルチレベル分析を用いた研究が今後の展望として述べられている（内田ほか，2011；河津ほか，2012）。今回の研究において，スポーツ・セルフマネジメントスキルと，自己効力感を介した集団効力感の関連性について先行研究を用いて説明を述べたように，競技パフォーマンスに繋がる媒介要因を明らかにするための，集団研究と集団の個人に着目した新たな着眼点による集団研究への取り組みの必要性が残された。

本研究で作成された尺度は，スポーツ集団の凝集性や集団効力感の向上をもたらす選手個人のマ

ネジメント能力の可視化としての活用に繋がり、スポーツ集団研究に新規性をもたらす可能性が示された。また、今後、スポーツ集団に所属して得られたマネジメント能力の社会における有用性を示すことで、スポーツ競技者と社会とを繋ぐ研究として発展性が見込まれる。社会に出る前に、運動部活動の舞台であるスポーツ集団という組織を経験しているにも関わらず、組織の中でどう行動していくかの認識が不足していることへの対処として「スポーツ・セルフマネジメントスキル尺度」は、スポーツ集団に所属する経験によって獲得してきた自己の能力を把握する機会をもたらす。スポーツ集団は目標の明確な集団であるため、社会での組織としての集団に共通しており、スポーツ・セルフマネジメントスキルの獲得が社会に出た際の多様な集団においても活用可能であることを説明することで、スポーツ集団に所属する意義を学生、ならびに社会に対して示すことができるであろう。

謝辞

本研究の実施に際し、予備調査、本調査及び追加調査にご協力頂いた大学運動部関係者、並びに部員の皆様に心からお礼を申し上げます。

文 献

- 阿江美恵子 (1986) 集団凝集性尺度の再検討. スポーツ心理学研究, 13(1): 116-118.
- 尼崎光洋・清水安夫 (2009) 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究—集団凝集性及び部活動ストレス—との関連による検討—. 学校メンタルヘルス, 11: 23-31.
- Bandura, A. (1986) Social foundations of thought and action: A social cognitive theory. Prentice-Hall: Englewood Cliffs.
- Bandura (1997) Self-efficacy: the exercise of control. W.H. Freeman and Company: New York.
- Bray, S.R. and Widmeyer, W.N. (2000) Athletes' perceptions of the home advantage: An investigation of perceived causal factor. J. Sport Behav., 23(1): 1-10.
- Carron, A.V. (1982) Cohesiveness in sport groups: Interpretations and considerations. J. Sport Psychol., 4(2): 123-138.
- Carron, A.V., Widmeyer, W.N., and Brawley, L.R. (1985) The development of an instrument to assess cohesion in sport teams: The Group Environment Questionnaire. J. Sport Psychol., 7(3): 244-266.
- Carron, A.V., Colman, M.M., and Wheeler, J. (2002) Cohesion and performance in sport: A meta analysis. J. Sport Exerc. Psychol., 24(2): 168-183.
- Cramm, J.M., Strating, M.M.H., Vreede, P.L., Steverink, N., and Nieboer, A.P. (2012) Validation of the self-management ability scale (SMAS) and development and validation of a shorter scale (SMAS-S) among older patients shortly after hospitalisation. Health Qual. Life Outcomes, 10: 9.
- DeSeCo/OECD (2005) Definition and Selection of Key Competencies: Executive Summary. <http://www.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf>, (accessed 2013-06-10).
- Ericsson, K.A., Krampe, R.T., and Tesch-Romer, C. (1993) The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. American Psychological Association, 100(3): 363-406.
- Feltz, D.L. and Lirgg, C.D. (1998) Perceived team and player efficacy in hockey. J. Appl. Psychol., 83(4): 557-564.
- Festinger, L. (1950) Informal social communication. Psychol. Rev., 57(5): 271-282.
- Gross, N. and Martin, W.E. (1952) On group cohesiveness. Am. J. Sociol., 57(6): 546-564.
- 長谷川美恵子 (1981) 集団凝集性の測定尺度の構成. 日本体育学会第32回大会号, 238.
- 本郷由紀子 (2005) 中学生における学級の集団効力感尺度の作成と自己効力感および学校適応感の関連について. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 8: 63-72.
- 池西悦子・宮本千津子・林 由美子・上野美智子・奥井幸子 (2001) キーワードを活用した授業による学びの分析—セルフマネージメント能力の育成を目指して—. 岐阜県立看護大学紀要, 1(1): 66-72.
- 磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄 (2000) スポーツにおける個人・社会志向性尺度の作成. スポーツ心理学研究, 27(2): 22-31.
- Janis, I.L. (1972) Victims of groupthink. Houghton-Mifflin: Boston.
- 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤 潤編 (1998) 心理学マニュアル—質問紙法—. 北大路書房: 京都, pp. 64-74.
- 金丸 友・中村伸枝 (2010) 学童後期以降に糖尿病を

- 診断された若者のセルフマネジメントに関する記述的研究—若者の経験の積み重ねの視点から—. 千葉看護学会会誌, 16(1): 17-25.
- 金丸 友・中村伸枝・荒木暁子・中村美和・佐藤奈保・小川純子・遠藤数江・村上寛子 (2005) 慢性疾患をもつ学童・思春期患者の自己管理およびそのとらえ方—質的研究 meta-study を用いて—. 千葉看護学会会誌, 11(1): 63-70.
- Karau, S.J. and Williams, K.D. (1993) Social loafing: A meta-analytic review and theoretical integration. *J. Pers. Soc. Psychol.*, 65(4): 681-706.
- 河津慶太・杉山佳生・中賀賀 匠 (2012) スポーツチームにおける集団効力感とチームパフォーマンスの関係の種目間検討. *スポーツ心理学研究*, 39(2): 153-167.
- 経済産業省 (2007) 企業の「求める人材像」調査2007—社会人基礎力との関係—. <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/282046/www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/cyosa2007.pdf>, (参照日2013年6月10日).
- Kozub, S.A. and McDonnell, J.F. (2000) Exploring the relationship between cohesion and collective efficacy in rugby teams. *J. Sport Behav.*, 23(2): 120-129.
- 久保正秋 (2006) アスリートのセカンドキャリア問題と大学. *現代スポーツ評論*, 15: 47-57.
- 黒澤宣輝 (2010) 生涯にわたるキー・コンピテンシーの形成パターンとその統一的評価尺度に関する研究—学習に連続性を持たせるために生涯の各段階で必要とされる共通評価尺度は何か—. 名古屋学芸大学短期大学部研究紀要, 7: 15-34.
- Latane, B., Williams, K., and Harkins, S. (1979) Many hands make light the work: The causes and consequences of social loafing. *J. Pers. Soc. Psychol.*, 37(6): 822-832.
- Lewin, K. (1943) Psychology and the process of group living. *J. Soc. Psychol.*, 17(1): 113-131.
- Martens, R. and Peterson, J.A. (1971) Group cohesiveness as a determinant of success and member satisfaction in team performance. *Int. Rev. Sociol. Sport*, 6(1): 49-61.
- 宮本千津子・上野美智子・栗田孝子・林 由美子・岩村龍子・池西悦子・両羽美穂子・篠田征子・奥井幸子 (2002) セルフマネジメントを主題とした授業の展開と課題. 岐阜県立看護大学紀要, 2(1): 175-181.
- 文部科学省 (2010) スポーツ立国戦略—スポーツコミュニティ・ニッポン—. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/09/16/1297203_02.pdf, (参照日2013年6月10日).
- 村上貴聡・橋本公雄・徳永幹雄 (2003) スポーツ選手のメンタルヘルス評価尺度改訂版の作成. *健康科学*, 25: 67-77.
- 永尾雄一・杉山佳生・山崎将幸・河津慶太 (2010) チームスポーツにおける集団効力感の資源とその有用性. *健康科学*, 32: 11-19.
- 二宮豊志 (1998) 組織マネジメントの基盤としてのセルフ・マネジメント. 東海大学政治経済学部紀要, 30: 167-182.
- 丹羽劭昭 (1968) 運動部員の成員性検査の作成. *体育学研究*, 13(1): 13-20.
- 丹羽劭昭・東山千鶴子 (1968) ソシオメトリーによる運動部の凝集性の検討. *体育学研究*, 12(4): 226-236.
- ライチェン・サルガニク編・立田慶裕監訳 (2008) キー・コンピテンシー—国際標準の学力を目指して—. 明石書店: 東京.
- Ronglan, L.T. (2007) Building and Communicating Collective Efficacy: A Season-Long In-Depth Study of an Elite Sport Team. *The Sport Psychologist*, 21(1): 78-93.
- 両羽美穂子・篠田征子・林 由美子・上野美智子・栗田孝子・宮本千津子・岩村龍子・大川眞智子・池西悦子・堀 ひろみ・奥井幸子 (2003) セルフマネジメントについての学生の学びと看護専門職における意義. 岐阜県立看護大学紀要, 3(1): 75-81.
- Schuermans, H., Steverink, N., Frieswijk, N., Buunk, B.P., and Slaets, J.P.J. (2005) How to measure self-management abilities in older people by self-report: The development of the SMAS-30. *Qual. Life Res.*, 14(10): 2215-2228.
- 島本好平・石井源信 (2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発. *教育心理学研究*, 54(2): 211-221.
- 島本好平・石井源信 (2008) 大学生における運動部活動経験評価尺度の開発. *スポーツ心理学研究*, 35(2): 27-40.
- 杉浦 健 (2001) スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究. *体育学研究*, 46(4): 337-351.
- 竹村 昭・丹羽劭昭 (1968) 運動部のモラルの研究 (1)—モラル調査の作成—. *体育学研究*, 12(2): 77-83.
- 多崎恵子・稲垣美智子・松井希代子・村角直子 (2006) 糖尿病患者教育に携わっている看護師の実践に対す

- る思い. 金沢大学つるま保健学会誌, 30(2): 203-210.
- 内田遼介・土屋裕睦・菅生貴之(2011) スポーツ集団を対象とした集合的効力感研究の現状と今後の展望—パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して—. 体育学研究, 56(2): 491-506.
- 上田 泰・義村敦子・横田絵理(2005) 組織のセルフマネジメント—概念・事例・実証分析—. 白桃書房: 東京, pp3-5.
- 上野耕平・中込四郎(1998) 運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. 体育学研究, 43(1): 33-42.
- 吉井 忍・八塚美樹(2009) 看護職員のセルフマネジメントの構造. 日本看護研究学会雑誌, 32(2): 101-111.
- Yukelson, D., Weinberg, R., and Jackson, A. (1984) A multidimensional group cohesion instrument for inter-collegiate basketball teams. *J. Sport Psychol.*, 6(1): 103-117.
- Zaccaro, S.J., Blair, V., Zazanis, M., and Maddux, J.E. (Eds.) (1995) *Self-efficacy, adaptation, and adjustment: Theory, research and application*. Plenum Press: New York.

(平成24年10月11日受付)
(平成25年 6 月14日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2013/7/25